

最後に利用者お一人おひとりが、住み慣れた地域で、その方らしい豊かな生活を送ることがいつでも続けられるように切に願っております。本年も何卒よろしくお願い申し上げます。

TEL (082) 894-8958



本年もよろしくお願いいたします。



会の最後に、利用者に感想を聞くと、「今日はグループホームを見に来てくれてありがとうとございました」と言い、構成員さんより「嫌じゃなかった?」と聞かれ、「嫌じゃなかった。また来て下さい」と笑顔で応えていました。この笑顔を見て、会議を行った意義ややりがいを感じました。

柏學園
目崎
結衣

家庭訪問では、ご家庭に着くと、保護者の方とお子さんが出迎えてくれ、お子さんは少し驚いた様子で緊張している表情も見られました。最初は戸惑いながらも保護者の方の膝の上で過ごす中で段々と落ち着いた様子でした。まずご家庭での様子を

した。私自身、子どもにとって、慣れ親しんだ物“が落ち着くきっかけになるという大事さに気付くことができ、園でもお子さんの好きなものを用意した落ち着けるスペースを作るなど安心できる環境を作っていきたいと思いました。また、ご家庭で遊んでいるおもちゃや絵本を見せていただきました。特に気に入っているものを教えていただき、実際に一緒に遊びました。保護者とのやり取りの中でお茶目な姿も見ることができ、微笑ましかったです。普段よく見ているユーチューブも一緒に見せていただき、集中して見ている表情がとても印象的でした。園ではなかなか見られない姿を見ることができ、ご家庭での安心した雰囲気の中だからこそ見られる表情なのだと感じました。

家庭訪問を通して、園生活だけでは分からないお子さんの姿や、ご家庭での工夫、保護者の方の思いに触れることができ、とても貴重な時間になりました。今後も園とご家庭でお子さんの様子を共有しながら、お子さんと保護者の方に寄り添い、安心して過ごせる日々を一緒に作っていきたいです。

全国児童発達支援施設運営協議会（広島大会）に参加して

柏學園
原田
道子

十一月二十日・二十一日に広島市で開催された第二十二回全国児童発達支援施設運営協議会に参加しました。「こどももみんなが社会」を考え、障害児支援における基礎・基本を考え、今日の課題を探る」というメインテーマのもと、障害児支援、社会的養護、意思形成支援についての講演や分科会が行われました。

初日は三名の講師による講演が行われました。上智大学名誉教授・大塚晃先生は「障害児支援の専門性を

考える」をテーマに、実践を踏まえながら障害児支援で大切にすべき心構えや、専門性向上ための要素などについてお話されました。子どもの意思が尊重されていること、そしてエビデンスに基づいた支援の重要性を改めて学ぶことができました。大分大学福祉健康科学部特任教授・山梨県立大学大学院人間福祉学研究科

特任教授の相澤仁先生は「社会的養護における子どもの権利擁護とその支援」について、社会的養護のもとに生活をしている子どもたちとの経験に加え、意見表明（アドボカシー）に関する基本的知識と取り組みについてお話をされました。子どもが安心して自分の意見を表現できる関係性や環境づくりの大切さを学びました。また、弁護士で子どもアドボカシーセンター広島代表・子どもの権

利条約プロモーター講座主宰の定者吉人先生は「障がいのある子どもが、自分の思いを自分なりに自由にあらわす権利、その支援のありかた」をテーマに、障害のある子どもも、自分に影響のある、あらゆることに自分の思いや願いをもっており、それらを保障するために意見表明支援、意見形成支援が必要であること、また、その基本となる「子どもの権利条約」について分かりやすく解説されました。

二日目は「意思形成支援について考える」をテーマとした分科会に参加しました。二つの実践報告をもとに行われたパネルディスカッションでは、入所施設という集団生活の中で、一人ひとりの思いをどう汲み取り、日々の業務の中でどのように応えていくかという難しさについて意見が交わされました。

大会全体を通して共通して議論されてきたのは、子どもの声に耳を傾けているか、子どもの思いが汲み取られているか、そして意志が尊重されているかということでした。今回の学びを踏まえ自らの療育を振り返りながら、「子どもの最善の利益を追求していく」という視点を忘れず今後の支援に取り組んでいきたいと改めて感じました。

笑顔あふれる、ふれあい祭

柏の実苑
川崎
肇

十一月八日にふれあい祭が開催されました。例年は十月に行う行事ですが今年度は暑さを考慮し、一か月遅れでの開催となりました。例年ふれあい祭のお知らせが出る頃にお手

皆さんからは「今年のふれあい祭は？」、「いつになるの？」という問いかけもありましたが、十一月に行うことを伝えると、皆さん安堵されとても心待ちにしてくださっている様子でした。

今年もオーブニングは柏の実バンドが演奏するということで、七月から練習を始めました。一年ぶりの楽器でしたが、皆さん張り切ってくださっており、楽しく練習を行うことが出来ました。今年はバンドメンバーが新しい楽器にチャレンジしました。最初はなかなか上手いかなということもありましたが、練習を頑張ってくださりどんどん上達していきましました。当日、リハーサルが始まり緊張した面もちのバンドメンバー。普段の練習とは違う緊張感の中、本番を迎えました。演奏の序盤はバンドメンバーの表情も固いように感じましたが、演奏が盛り上がるにつれ少しずつ表情が和らいでいき

ました。演奏が終わる頃には晴れやかな笑顔になっていました。日々の練習の積み重ねや演奏の成功体験でバンドメンバーの自信につながったのではないかと思います。

私は当日、仮装カラオケ大会で審査員と司会を受け持ちました。今年度は用意した席だけではなく、らせん階段まで沢山のお客様が来てくださり、大賑わいの中でカラオケ大会を行うことが出来ました。参加者の皆さんが観客の多さに緊張されるかと心配していましたが、歌うことが大好きな方々の集まりの為か、物怖じすることなく心をこめて熱唱される方、楽しそうに体を動かしながら歌われる方と皆さん堂々と歌いきっておられました。カラオケ大会の最後にはサプライズで皆さんが大好きな「手のひらを太陽に」を合唱しました。その場にいた全員で歌ったり、踊ったりし沢山の笑顔を見ることが出来ました。最後まで観客の皆さんからの温かい拍手や声援を頂き、より盛り上がりたように感じます。

今年も皆さんのご協力のおかげで、笑顔あふれる楽しいふれあい祭となりました。ご多用の中、ご足労頂きありがとうございました。

年忘れクリスマス会

十二月二十日、安芸区民文化センターで年忘れクリスマス会が行われました。東南ロータリークラブの方、RIエコーの方、広島商業高校の方をお招きし、総勢八十名と例年より多くの方々に参加していただきました。会場に到着した利用者の皆さんはウキウキ・ワクワクされており、会の始まりが待ち遠しい様子でした。

乾杯の合図で会が始まると、名札を作り、テーブル毎に自己紹介をしました。自分のことを知ってもらおうと一生懸命自己紹介をしている姿が印象的でした。また、毎年ご参加くださるお客様からは「今年も楽しみにしていました」というお言葉もいただきました。

お話をして和やかな雰囲気になったところで、次は出し物です。利用者さんは三つのグループに分かれ、ダンス、手話、歌を披露しました。ダンスグループは、ポンポンを持ち『ジャンボリミッキー』の曲に合わせて元氣よく踊りました。手話グループは、手話をしながら『ひまわりの約束』を歌い、歌グループは『きらきら星』『赤鼻のトナカイ』を自分たちで作った楽器を鳴らしながら歌いました。私は手話グループの担当をさせていただいたのですが、

練習を始めた時から、歌声の迫力と共に利用者さんの温かい気持ち伝わってきて毎回感動していたので、この感動が伝わってほしいと思っていました。本番では少し緊張している様子でしたが、利用者さんの温かい気持ちはお客様にも伝わったように「すごいね」「良かったよ」とたくさんさんの温かい言葉を掛けていただきました。

R1エコーの方の合唱では、素敵な歌声だけではなく、一緒に歌うことの楽しさを味わわせていただきました。利用者さんもR1エコーの方と一緒に歌えることを心待ちにしており『三百六十五歩のマーチ』や『それ行けカープ』が流れると一緒に歌ったり、踊ったりと思い思いに歌を楽しんでいました。また、広島商業高校の方はハンドベルの演奏をして下さり、綺麗な音色に会場全体が魅了されました。

最後は待ちに待ったサンタクロースの登場です。利用者の皆さんはプレゼントを受け取ると大事そうに抱きしめ、満面の笑みを浮かべていました。

今年の年忘れクリスマス会も笑顔や温かい言葉をたくさん見聞きでき、素敵な時間となりました。

柏の実苑 藤賀 景子

瀬野 柏の実苑
三原 奈苗

瀬野キャンパスでは、絵画三作品、習字五作品が、あいサポートアート展に選ばれました。

感性豊かな作品が展示されていました。飾られた作品を利用者の方が嬉しそうに見つめている姿を見て、改めて、一緒に見学に行くことが出来て良かったと思いました。日ごろ、展示会という形で作品を鑑賞する機会は多くありません。一人ずつ作品の前で写真を撮る際は、少し照れくさそうな笑顔も見られましたが、自分の作品や仲間たちの作品を見ながらどこか誇らしさも感じられました。

今回のあいサポートアート展を通して、作品は技術の高さではなく、「その人らしさ」を感じとる事が大切だと思いました。それぞれが持つ個性や視点がそのまま作品になり、見る側にも新しい発見や気づきを与えてくれました。絵や字を書く楽しさや表現する喜びを、利用者の方が改めて感じる大切な機会にもなったと思います。そして、支援者としても、利用者の方の可能性が広がっていく瞬間に立ち会えたことは、大きな喜びでした。これからも、利用者の方々の小さな挑戦や思いを大切に、一人一人が自分らしく輝ける場を作っていきたいと思いました。

瀬野柏の実苑
大園
隆史

ひとしきり餅をついた後で、ぜんざいが運ばれてきました。ぜんざいも毎年の餅つき大会には無くてはならない食べ物です。一杯のぜんざいに「今年の餅つき大会は、よかったなあ」と思いを馳せながらじつくりと食べる人、一杯では満足せずもう一杯いただき満足する人。ぜんざいを食べる時間も、それぞれの楽しみ方があるそうですね。ぜんざいをそれぞれ食べ終えたところで係から挨拶があり、今年の餅つき大会も終わりました。

『もちつきや 世代を超えて絆結び
新たな年を共に迎えん』

今回の餅つき大会も瀬野の仲間達にとつていい思い出、経験に繋がったのだと思います。

